

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	岡倉覚三書簡・岡倉由三郎関連資料
Author(s)	清水, 恵美子
Citation	五浦論叢：茨城大学五浦美術文化研究所紀要, 23: 105-120
Issue Date	2016-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10109/13061
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

【資料紹介】

岡倉覚三書簡・岡倉由三郎関連資料

清水 恵美子

一、川上宗雪氏所蔵岡倉覚三書簡

東京都台東区池之端に本拠を構える江戸千家第十代川上宗雪氏は、岡倉覚三（一八六三〜一九一三）の自筆書状を二通所蔵する。いずれも『岡倉天心全集』（全八巻・別巻一、平凡社、一九七九〜八一年）には未掲載の書簡である。

『岡倉天心全集』別巻の年譜には、明治十二年（二八七九）「このころ茶道を正阿弥に習ったという」と記される。岡倉覚三に茶道の心得があったことは、著作『The Book of Tea』(『茶の本』、一九〇六年)や、ボストンのイザベラ・スチュワート・ガードナー Isabella Stewart Gardner (1840-1924) に贈った茶道具一式（イザベラ・スチュワート・ガードナー美術館所蔵）などから窺える。

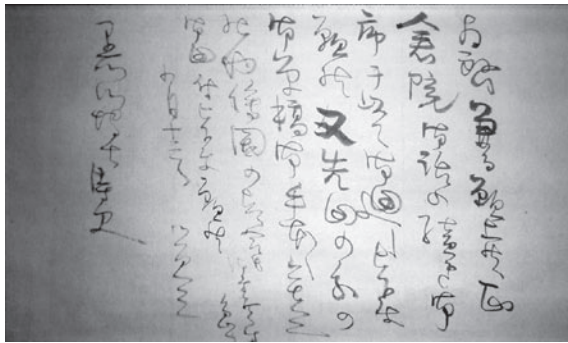
江戸千家は二〇一五年九月二日、茨城大学五浦美術文化研究所が所管する「旧天心邸」で茶会を開催した。六角堂で行われた献茶では、床の間に覚三の消息（黒川真頼宛）を表装した軸が掛けられた。このたび、川上宗雪氏の快諾を得て、岡倉書簡を紹介することが可能となった。これを機縁に本学と茶道界との一層の結びつきを祈念する。

(一) 黒川真頼宛て岡倉覚三書簡

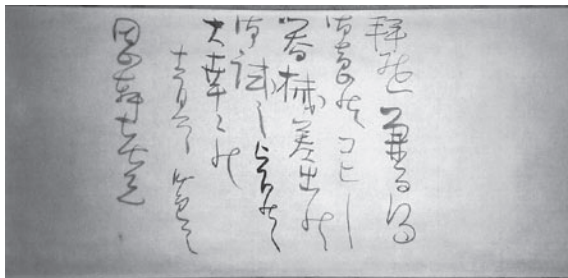
〔封筒〕 なし

〔本文〕

拝啓 兼而願上仕候正倉院御話の続き御序ヲ以て御廻し被下度願仕候 又先回の分の御草稿御手本ニ在之の内絵図の在り合も御座ならず 急々御回付被下度願仕候



黒川真頼宛て岡倉覚三書簡 (川上宗雪氏所蔵)



森田思軒宛て岡倉覚三書簡 (川上宗雪氏所蔵)

五月十三日 覚三
黒川博士侍史

(二) 森田思軒宛て岡倉覚三書簡

〔封筒〕 (表) 森田思軒先生

親展差上置

(裏) 岡倉覚三

〔本文〕

拝啓 兼而得御意候コヒー器械差出候 御試し被下候バ大幸ニ候
十二月六日 覚三
思軒老兄

二、茨城県天心記念五浦美術館所蔵岡倉由三郎関連資料

岡倉由三郎（一八六八―一九三六）は岡倉覚三の実弟である。言語学と英語学を修め、東京高等師範学校等で教鞭を執った。また、*The Japanese Spirit*（一九〇五年）『*The Life and Thought of Japan*』（一九一三年）を海外で出版し、ボストンの教育財団ローウェル・インスティテュートの招きを受けて米国で講演するなど、西欧への日本文化紹介者として知られる。覚三を介してボストン美術館や日本美術院とのネットワークを築いた由三郎は、兄の没後もその英語力を見込まれ、日本と米国で交わされる書簡の翻訳や、一九一六年ラビンドラナート・タゴール（Rabindranath Tagore, 1861-1941）来日時の通訳を行った。一九三一年には米国で開催された現代日本画展に美術特使として派遣され、満州事変の勃発で米国民の反日感情が激化するなか、講演や図録執筆、ラジオ放送などを通して、日米美術交流の促進を図った^①。

茨城県天心記念五浦美術館は、由三郎の孫にあたる岡倉俊彦氏旧蔵資料を所蔵している。執筆者は二〇一三年から、未発表の資料を中心に調査を開始した。管見によれば、由三郎の活動を日本美術史の視点から論じた研究はほとんどない。しかし、資料調査を通して、一九〇四年のキョッソーネ美術館における日本美術コレクション整理、米国の現代日本画展における諸活動など、彼と美術との関わりを示す資料が見つかった。今号では、この中から主に日本美術院やボストン美術館関係者との間で交わされた書簡を紹介する。一九三二年の由三郎の

米国派遣は、覚三を核に美術を介して形成された日米のネットワークが機能した結果であるが、これらの書簡を通して、日本美術院とボストン美術館との仲介を由三郎が務めていたことを窺うことが出来る。そのため、彼らの関係を考えるうえで貴重なものである。

(一) 齋藤隆三宛て岡倉由三郎書簡

(昭和) 六年七月十三日

封筒、巻紙

〔封筒〕(表) 齋藤隆三様 そしな二相添

(裏) 封 六、七、一三。 岡倉由三郎

〔本文〕

拝啓 この度は私の為にわざわざ御出馬御援助をたまはり大に力つよく感じました また大洗の一夜はさすががたきおもひでの種で御座います 唯十日会の為にはかゝしき物語も致し得ずあゝしたをこがましい雑談をあへてし汗顔のほか御座いません それに對し院の御もてなしやら会からの御包物やら穴へも入りたく感ぜられます その御わびまでに御門まで参上よろしく 渡邊氏その他へ御鳳声のほどを願ひあげます 草々頓首

六、七、一三。 岡倉由三郎

二伸。芋銭画伯のお話をよにもうれしく拝聴、就ては甚だ申上げかねますが同画伯に自然御出あひの時何なりとも筆の跡一葉御乞ひうけ下されたう存じます。十日会からの包物は私には頂戴いたす資格のないもの、それを色紙の代に御あて下さるは幸この上なう、河童などの大物ならずともその蒐集にかゝるちりご玉一二個にても結

構、さすれば、間接に院の即ち横山氏のこの度の御好意も長う記念致し得る次第で御座います いつもながらの勝手御ゆるし下されませ

(二) 岡倉由三郎宛て早崎梗吉書簡

(大正) 三年五月十日

封筒、用箋

〔封筒〕(表) 東京市小石川区雑司ヶ谷二七

岡倉由三郎様 親展

(裏) 北京扶桑館 早崎梗吉

(消印) 3. 5. 17

〔本文〕

一路福星御影を以て九日午後五時塘沾上陸急行列車にて今夜九時五十九分北京着 表記の處ニ投宿致し候 近日中居所確定の筈ニ御座候 公使館、正金銀行、其の他二三の友人より引張胤にて聊か取捨ニ選み申候 何れ後便扱ニ得貴意度候 草々

五月初九十 早梗吉

岡倉先生 侍史

(三) 岡倉由三郎宛て早崎梗吉書簡

(大正) 四年四月十九日

封筒、用箋

〔封筒〕(表) 小石川区雑司ヶ谷町三十七番地

岡倉由三郎様 親展

(消印) 4. 4. 19

(裏) 印「東京本郷区千駄木林町二百卅四番地 早崎梗吉」

〔本文〕

拝啓昨夜ハ深更まで御邪魔申上失礼致候 別紙目録相認め申候間 宜敷御取計候□□奉願上候 御手数数の段恐縮千万ニ奉存候 尚別紙表具代并ニ材料受取書御高覧ニ供し候 不足額二百十五円六十錢ハ乍恐近日中拝趨の節擲下の栄を給りし御願上候 先ツ右御願迄早々不盡

岡倉先生 侍史

早崎梗吉

(四) 岡倉由三郎宛て新納忠之介書簡

(大正) 三年十一月十五日

封筒一枚、巻紙一枚

〔封筒〕(表) 東京市小石川区雑司ヶ谷町百三十六番地

岡倉由三郎様 急親展

(消印) 3. 11. 15

(裏) 奈良市雑司町五九 新納忠之介

十五日

〔本文〕

拝啓仕候 益々御多祥の筈奉慶賀候 扱過日ハ御書面難有候 御尋申上候件ハ御申越被下候通りニ外ならずと被存候其后何事も無之候 扱兼ねて御依頼相受け候后不絶都合よき仏像注意致し居り候處此頃聖観音の立像一有之候 丈台座とも鯨尺にて二尺六寸有之候 年

代ハ藤原末頃かと存じ候 仏像ハ木地ニして現在ハ黒色ニ変し候

胸より腹部を貫して膝のあたり迄瓔珞を彫り出したるものに御座候

作柄ハ充分と可申ものニ無之候も又世ニ沢山あると可申仏像でも

無之故人にとられぬ内ニ引きとり置く方宜敷からんと存じ兎に角拙

宅迄引きとり申候(代金ハまだ払つてなし)もし尊台ニ於て御引取

り相成候ハ、御送り致したく宜敷候代金ハ六拾五円ニ候 聖観音の

売物ハ容易ニ無之候 今一人銅の観音ニ候 之れも同時ニ引きとり

置申候 之れは金三拾円ニ御座候 小形ニして丈三寸五分(鯨尺)

台座とも五寸(鯨尺)位のものニ御座候 瓔珞ありて美しきものニ

御座候 此銅造ハ強ひて拙者ハ購入可致氣無之(外ニ一ツ所持する

か故)も御友人でも御希望あれハ同時ニ御送り致しても宜敷候 一

寸御通知申上候 勿々敬具

十一月十五日 新納忠之介

岡倉由三郎様

追白 中川君米国より通信なき為め渡米の期確定せぬやニ御座候

もし相分かり候ハ、一寸御知らせ被下度候願上候

(五) 岡倉由三郎宛て新納忠之介書簡

(大正か) 三年十一月二十三日

封筒、巻紙

[封筒](表) 東京市小石川区雑司ヶ谷町三十七番地

岡倉由三郎様 親展

(消印) 3. 11. 23

(裏) 奈良市雑司町五九 新納忠之介

十一月廿三日

[本文]

拝啓仕候 益々御精細の由奉大慶候 扱仏像代金領収書ハ書面にて

御送り致御座在候にや 御入手被下候事と存上候 仏像ハ木造の方

ハ持物無之又少々破損の箇所有之二付修復の上御送り可申上候 拙

者ハ本日九州へ急に出発する事に相成り 来る廿九日頃帰宅可致ニ

付 其上御送荷可致候 銅造の観音ハ本日送附申上候 一百円已上

勿々頓首

十一月廿三日 新納忠之介

岡倉由三郎様 貴下

(六) 岡倉由三郎宛て新納忠之介書簡

(大正三年か昭和三年) 十二月十四日

封筒、巻紙

[封筒](表) 市内小石川区雑司ヶ谷町三七

岡倉由三郎様 親展

(裏) 十二月十四日

麻布区広尾町七五

福永方 新納忠之介

[本文]

拝啓仕候 昨夜ハ遅々罷出大ひに御邪魔仕候 又飛だに難題申出相

濟まず候へとも之れハ御許様迄御承知被下度候 本日拙案の天平更

紗其々ニ御座とも風呂敷用として御送り申上候間御笑納被下度候唯
今より出発帰途二つき申候 勿々敬具

十二月十四日 新納忠之介
岡倉由三郎様

(七) 岡倉由三郎宛て新納忠之介書簡

(大正か) 八年十二月十二日

封筒、巻紙

〔封筒〕(表) 東京市小石川区雑司ヶ谷町三七

岡倉由三郎様 親展

(消印) □□・12

(裏) 十二月十二日

奈良市雑司町五九 新納忠之介

(消印) 8. 12: 13

〔本文〕

拝啓仕候 益々御多祥の由奉賀上候 扱今回金五百円御送り被下難
有候 年末大ひニ助かり候 仏像の厨子承知致候 御都合にて全長
と台座の圣を御知らせ被下度候

(執筆者注：仏像図あり)

ウキテモアー氏未だ用事済まず御滞在の由小生も天候の工合にて出
航出来兼ね居り候處本日愈々高知ニ向け出発可致未だ海上聊か不穩
の様ニ御座候とても決行致し来る廿三日頃一と先づ帰宅して又々
来春早々より高知ニ可参 今回文部省より二十一日間の出張命令ニ
接し歳末多忙の折柄閉口致し居り候 ウ氏は本月二十五日頃御出で

被下候ハ、好都合ニ御座候左様御伝へ被下度先ハ一筆始此御礼申上
候 勿々敬具

十二月十二日 新納忠之介

岡倉由三郎様 生下

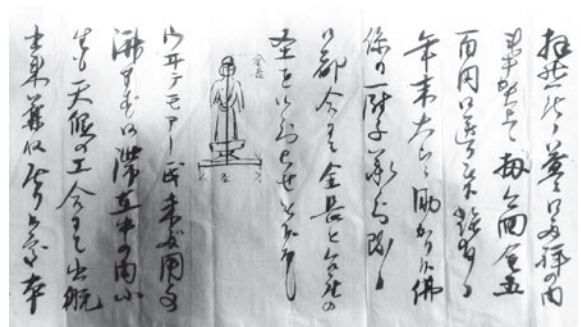
(八) 岡倉由三郎宛て新納忠之介書簡

年不詳、七月九日

封筒、用箋

〔封筒〕(表) 東京市小石川区雑司ヶ谷町三十七番地

岡倉由三郎殿 急親展



岡倉由三郎宛て新納忠之介書簡 (部分、仏像図あり)
(茨城県天心記念五浦美術館所蔵)

〔裏〕奈良市雑司町五九 新納忠之介

七月九日

〔本文〕

拝啓仕候 追々暑氣烈敷御座候處益々御清福ニ被為人候由大慶此事
ニ御座候 扨過日ハポストン博物館ヨリの手当金御送付被下難有候
折柄九州へ出張罷在居り帰来草々各工場等へ出張候為め乍存今明と
打ち過ぎ誠ニ相済まぬ事ニ有之候 昨夜御羽書ニ接し大ひニ恐縮致
し候何卒不悪御海容なし被下度候 別紙領収書（日本文字）差上候
間宜敷様御取り計らひ被下度候先ハ一筆御礼申上候 勿々敬具

七月九日 新納忠之介

岡倉由三郎様

〔九〕小川芋錢宛て岡倉由三郎書簡

〔大正〕八年十二月二十六日

封筒、巻紙

〔封筒〕〔表〕茨城県久慈郡牛久

小川芋錢様

（消印） 8. 12. 26

〔裏〕封 八、一二、二六、 岡倉由三郎

印「東京市板橋区中新井□□丁目（電話練馬一三六）」

〔本文〕

小川芋錢さま

なかなかおさむくなつてまゐりましたが、ますく御清穆のおんこ
と、ぞんじあげます さてこのあひだこはれるにまかせ、駄文一篇

を草し愚論をはいてみましたなかにまたくかねて御惠贈の「むじ
な月」のお作のお賛を借用いたしました。あ、した芸道の奥秘の
妙諦を世人にもわかかってともにその益をうけたさのしわざ失礼の段
をいくへにもおわびまうしげます。なほこれも御惠与のをなげけの
はらのきつねのおんうたも、向上心を過去の抑制（不備な心身）と
の闘争にもだへくるしむわれくとうへを、きつねの獸性にことよ
せておうたいなされしものとの小生一家のかつての解釈のま、に、
朝夕お□ふでのかほりとともに拝味、つきせぬ興感をおぼえてをる
のでございます。これもまたなんぞのをりに感想をそへて世人によ
ろこびをわかちたい野心をいだいております。御好意によるくださ
れもを拙劣な随筆のなかにをりこむなめげなしうち、どんなに御迷
惑の儀をはぞんじながら、どうやらじつとしてをられぬこゝろもち
にかられての挙作、どうぞおゆるしをねがひあげます。それらのお
わびをかかねて雑誌「新青年」一月号おそるくおおくりまうしあげ
ます。 敬具

八、一二、二五 岡倉由三郎

二伸、をなげけ稲荷の伝説をつつたすりまきが、くづのはのそれの
やうに、もしございましたら、書名、ご教示をあふぎたくぞんじます。
かさねくの厚顔のねがひおゆるしねがひあげます。

〔十〕横山大観ローマ開催日本美術院展開会の辞草稿

昭和五年

封筒、原稿用紙十七枚

〔封筒〕〔表〕横山氏開会の辞 草稿一

(裏) 印「東京市中新井 岡倉由三郎 電話・練馬・一三三六」

〔原稿〕

伊太利帝国を挙げての御好意によりまして当地に於て我が日本帝国現代絵画作品展覧会の開催されますに当りて、閣下并に諸君に対し、私がこの展覧会の出品作家を代表して、又日本の画家の一人として茲に一言御挨拶を申し上げますことは私の光栄とする所であります。

今更に事新らしく申上げますまでもなく当伊太利はローマ帝国の昔に於て已に鬱然たる工藝術の発達を遂げられまして全歐羅巴芸術の源泉をなしました地であります。爾後今日に至るまで時によりて何ほとかの除替はありましたものゝ、併しながら概して絵画に彫刻に幾度の名匠大家の輩出を見まして常に歐羅巴全土の藝術の首班たる位置を保たれて居ります所であります。さうした西洋藝術の源泉地であり中心地である前の、この伊太利の国土に於て、東洋藝術の最も純にして正しい命脈を保ち、更に現代に於ても最も盛んなる開発状態を持して居ります我が日本の現代絵画の代表的作品を持参しまして、茲に展覧会を開き、大方の御清鑒を得ますことは東西藝術の比較批判をして戴ける上に於て少なからぬ効果を齎らすべく極めて意義のあるべきものであらうと信ずる所であります。尤も最近数年間に於て、我が日本の現代絵画の展覧会も、巴里其の他に於て已に兩三回開かれて居ります。併しながら其れ等は単に幾十点かの日本画作品を、甚た無造作に持ち来りまして、西洋画の陳列館である会場に、その適不適に就いてさへ一応の考慮も払はれずに、唯漫然と陳列して大方の一覽に供されましたばかりであります。換言すれば、西洋画を觀るべき環境の下に、全然その製作材料を異にし、顔料を異にし、表頭方法を異にし、更によ

り多く根本的に内容精神を異にして居る東洋画を觀ようとしたのであります。觀せたのであります。遂に東洋画の真意義の正しく理解する、ことのあり得る筈はありませぬ。然るに今回の展覧会は、我が大倉男爵の深慮ある遠大な理想から企画せられ、更に伊太利国民諸君の理解ある協賛助力から実現さるゝに至つたものであります。在来未だ曾つて何つれの処にも試みられたこのない空前にして恐らく絶後たるべき大規模の設備を施したものでありまして、茲に海風万里を隔てた遠き伊太利国に日本の小天地を写し出して日本画を鑑賞するに適するだけの極めて大仕掛の環境を作りまして、その準備の下に、その背景の下に、我が日本画を觀て戴くことを得るやうになりましたもので、吾等は日本国民として、特に日本の作家として、無限の欣幸を覚え、吾等には居られぬ次第であります。

元來東洋画は、東洋独自の環境の下に生れ、東洋独自の発達を遂げたものでありまして、其の間には又、支那大陸に古く発達しました老子や莊子の幽玄虚淡の摂理と相通ずる所も多く、更に仏教の一流である禪宗の、自発の尚んで説明を避け、單純の表現の中に豊富なる意味を写せしむるといふ理法とも相通ずる所の少くないものであります。されば東洋画の第一義としては、形似を尚ばずして精神の發揚を重んずるといひ、資格韻致の画面に流るゝのを推すといひ、或は平たくいへば、絵は筆端に表はるゝ、筆者の心の動きでなくてはならぬともいはれて居ります。特に之を描くには毛筆を用ひ、その毫端から送り出つる所の線を以て主体を描出する場合が多いのでありますから、特に線の表はれ出でたる姿を尚び一つ引かれた線の上にも、或るものは強く、或るものは柔らかく、或るものは詩的に、或るものは情致を保つとい

つたやうに、時に応じ場合に依じてさまへな複雑な意味を含んだものでなければならぬとさへ言はれて居ります。之を要するに、人物を描くにしても、花鳥を写すにしても、又は風景を画するにしましても、本義とする所は其の外形の実写ではなくして、其の有する所の心持、即ち内に蔵する精神の摘出であるのであります。此点が、多く客観的の立場から外形の精細を写し出さんとすること生命とする西洋画と、甚だ立場の違ふものがあるのであります。西洋画は説明に親切であります、東洋画は言はざるの妙を稱して説明を避け、多くを偏に観る人の詩的想像に任せんとして居ります。例今へて見ますれば、僅かに数輪の花を示して萬葉の満開は唯推想に譲らんとして居る場合もあります。一抹の白雲を描いて山深き処嵐氣漲るの大自然を脳裡に浮ばしめんとする場合もあります、家よりも大きな人を描き、人の顔よりも大きな花をすら描きて、其の場合に主要なるもの、空氣を充塞せしめんとする事もあります。又東洋画には、くの場合、描き残された余白といふものがあります。これも素より描き忘れられた空隙でもなく、又描き足らぬ空間でもありません。この空間は描き潰された場面よりも、より多く意味を持つ場面でなければなりません。言ひ換へれば、空隙でなくして寧ろ一種の充実であります。又東洋画には屢々彩色を避けて、墨から成る黒の一角だけで―或はソレに僅かの淡い彩色を加へて―描かれました謂ゆる水墨画があります。これも此場合には、墨画は黒といふ一角だけで描かれたものであると単純なる解釈の下に片付けられるべきものではありません。縦令外に表はされたものは墨から成る黒の一角でも、それは肉眼に映じた感じだけのことであります。謂ゆる心眼の上には、實際的に使用された赤や青や緑やの絢爛たる色

取りよりも、尚多く複雑したるさまへの色が映ずるものでなくてはなりません、斯うした所に最も多く東洋画独自の生命はあります。唯併しながら、実際の比例を超えて描き出された花や木や、それが唯不思議な感じを持たずに過ぎなかつたり、又描き残された余白が唯の空間であつたり墨画が単なる黒一角の画としか観られなかつたりすることも素より少くはありません。それは之を観る人の予備智識の欠乏せる場合、若しくは謂ゆる心眼の開かれて得なかつた場合から来ることもあります。又は作者の表現技術が未熟なるが□に現はさんと欲して現はし得ないが為めに來る場合もあります。

要するに東洋画本来の意義が斯うしたものでありますだけに、縦令それは近年西洋文明との著るしい接触から幾分の変化は持ち來らされたとしても、尚徹底した説明的のものであり、飽滿のものであらうとする西洋建築の中では、到底之が鑑賞には適し得ないものであると信じます。特に我が日本に發達しました東洋画は、平温な氣候、秀麗な山川、四季折々風韻ある自然を背景とし、この自然に添うて成立つた一種特別な風俗に囲まれ、更に、強く併しながら平和な、奇麗好きに而して淡白な、而して極めて草木や自然を愛することを特質とする国民性に淘汰されて、以て今日を為したものであります。すれば之を観てその真体を味ふが為めには、先つ以て之を理解するに必要なだけの特殊の環境がなくてはなりません。清楚なる白木造りの建築の中で、青畳の上に座して、ならうなら一椀の緑茶を啜つてなりと鑑賞すべきでもありません。今回の展覧会の設備が、少くとも此希望の多分のものを共に將來して、日本といふ特殊の環境を或る点まで出現せしめて、その間に於て日本の絵画を観て戴き得ることは我等の本懐と

する所であります。併し再び翻つて考へまするに、我が日本の国語は、日本民族以外には、他の何つれの国民にも容易に修得の出来ないといふほどに、世界中に難義な国語であるといはれて居ります。同じ日本民族の国民性の發揮である日本画も、或はそれと同じやうに日本民族以外に容易に真諦を理解し得ぬものであるかも知れませぬ。併しながら曾つては東洋独特の食物であつた「うどん」も、伊太利国民は克く之を理解し消化し同化し、今日ではマカロニなる名称の下に自家独特のものとまでされて居ります。さほとまで東洋のものに理解を取入れとの上に特殊の力を持たれます伊太利国民諸君は、同様に日本画の真諦をも克く正しく理解されまして更に大に吾々に有益なる批判と示教とを以て酬えらるべきことを信じて已みません。又只管希望します所であります。終に臨みまして再び閣下并に諸君の御厚意に対し深甚なる感謝の誠意を表します。

(十一) 岡倉由三郎宛て富田幸次郎書簡

昭和七年三月三日

封筒、用箋二枚

〔封筒〕(表) Professor Yoshisaburo Okakura

c/o Nippon Yusen Kaisha

551 Market St San Francisco, Calif.

(削除) Nippon Club, 161 West 93rd Street, New York City

(追記) Cabin #249

(消印) BOSTON MASS MAR 4 1932

(裏)(印刷) MUSEUM OF FINE ARTS

(消印) NEWYORK MAR 6 1932

〔同封物〕名刺二枚

〔本文〕

拝啓

先生最早や紐育に御安着遊されし御ことと存上ます 欧州では大層御忙しいやうに承りましたが大西洋上幾等か御静養あらせられたことと御座いますよう

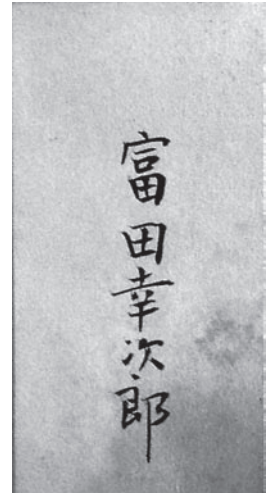
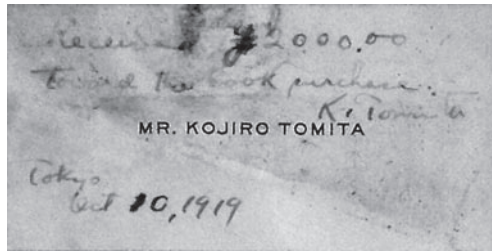
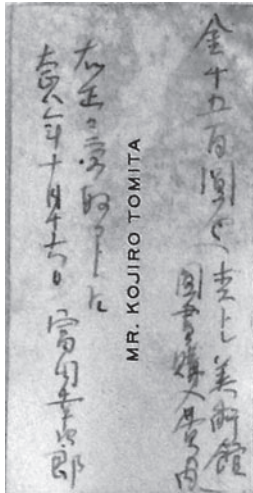
昨日ロンドンより御認め下さいました玉書拝見いたしました それによりますと先生御帰途御急ぎの為或ハ当地に御立寄なく西部に御向相なるやも計られずとの仰せに失望いたして居ります 若し御都合が御出来になりますれば一日なりとも御堡下さるやう切に御願ひ、いたします

日本新画展覧会も好評判に御座います 開会前に“Cultivation” by Michio 一点が売約となりました そうして“Legend of Mokuran” by Kwousetsu ハローリック館のホーシェ氏が日本と交渉いたしました結果五百五十弗と定まりました

なほ平井楳仙の絵ハ一度当方二列くりましたがローリックの手を経て紐育の人が買求めることになりましたので返送いたしました

序で御座いますが売れました絵の代金はローリックの方で扱で日本に送金すると申して参りましたが左様いたしましたして宜しう御座いますか 総領事館の手を煩はすのは余り込みへるやうに存ぜられますよう御座いますか

御繁忙中種々と御尋ねをいたしまして恐縮の至りで御座います 宜しく御海容希上ます



富田幸次郎の名刺（表 漢字／裏 ローマ字、岡倉由三郎宛て富田幸次郎書簡に同封）
（茨城県天心記念五浦美術館所蔵）

千九百三十二年三月三日

敬具

岡倉先生

富田幸次郎

〔十二〕 岡倉由三郎宛て渡辺実書簡

昭和八年二月十四日

封筒、巻紙

〔封筒〕（表）東京板橋区練馬中新井

岡倉由三郎様

（消印）水戸 8. 2. 14

（裏）水戸 渡辺実

〔本文〕

納豆ハ暑中なればニ、三日寒い時でも一週間以上になりますと味が
変わりますから其御つもりで召し上がって下さい

十四日 渡辺

岡倉先生 机下

解題

一、岡倉覚三書簡

（一）は、国学者、黒川真頼（一八二九～一九〇六）に送られた『國華』
（明治二十二年創刊）への寄稿に関する書簡である。本書簡は、平成
十四年十二月七日、畠山記念館で開催された國華清話会発足会並びに
第一回特別鑑賞会に展示された。^②

(二) は、友人であるジャーナリスト、森田思軒(一八六一—一八九七)に「コーヒー器械」を贈ったことを示す書簡である。「コーヒー器械」とはコーヒーミルを指すと推察される。岡倉がコーヒーを嗜んでいた可能性を示唆する内容である³⁾。また、本書簡の「コーヒー」の言葉から、茨城大学が北茨城市の人々や地元企業との協働で企画・開発を進めた新商品カップオンコーヒー(二〇一六年九月三日発売)の商品名が、「五浦コーヒー」と名付けられた。商品のパッケージには、本書簡の存在が示され、箱内には、写真や現代語訳とともに詳しく紹介する紙が納められた。

二、岡倉由三郎関連資料

(一) の書簡は日本美術院の齋藤隆三(一八七五—一九六一)に宛てた岡倉由三郎の書簡である。『英語青年』第六十五巻第十号の「個人消息」によると、由三郎は昭和六年七月十一日・十二日、水戸で講演を行っている。同年七月十五日の『いはらき』新聞に掲載された由三郎の講演録「文藝漫談」には、「この間愛宕山の放送局へ渡邊氏と齋藤隆三氏と見えますして、こちらへ出て何か話をしたら」と言われたので、「文藝漫談」の題で話をする事になったと記される⁴⁾。講演が齋藤隆三、渡邊氏の依頼であったことは、書中の「私の為にわざ／＼御出馬御援助をたまはり」という記述と合致する。そのため、本書簡の制作は昭和六年と推定した。「渡邊氏」とは、(十二) 由三郎宛書簡の差出人「渡辺実」のことであろう。「また大洗の一夜はわすれがたきおもひでの種で御座います」という一文は、大正十四年九月二日から三日にかけて、日本美術院が遠足会で五浦を訪れたことを指す

と考えられるが確証はない。「二伸」から、由三郎が齋藤を仲介に小川芋銭(一八六八—一九三八)に色紙を一枚所望したことがわかり、横山大観(一八六八—一九五八)との交流も窺われる。

(二) と (三) は、早崎稔吉(一八七四—一九五六)が由三郎に宛てた書簡である。早崎は、岡倉覚三のボストン美術館中国美術品収集に助力し、その知識や鑑識眼が高く評価された。明治四十四年四月に同美術館中国日本美術部の鑑査顧問(Advisory Staff)に嘱託され、中国現地での収集活動に尽力する。早崎は英語ができなかったようである⁵⁾。三没後は、ボストン美術館との事務的な連絡は由三郎経由で行われるようになった。早崎とボストン美術館との関係は、ボストン美術館の富田幸次郎が来日し、両者の関係を解消したい旨を伝えた大正十三年四月まで継続した。(二) は早崎が北京に到着したことを知らせる内容で、(三) は、「目録」と「表具代并二材料受取書」の送付について記されている。(二)、(三)とも早崎が中国へ渡り、現地で収集した美術品について報告していることから、大正四年の書簡であろうと推察した。

(四) から(八) は新納忠之介(一八六九—一九五四)が由三郎に宛てた書簡である。新納は明治二十九年日本美術院が改組されて第二部(彫刻部)が設置されると、その責任者となり仏像修理に従事した。明治四十二年三月から、仏像の修復や新館の展示作業の相談役としてボストン美術館に勤務した。明治四十四年四月には、早崎と同様、同美術館中国日本美術部の鑑査顧問に嘱託された。(四)には「兼ねて御依頼相受け候后不絶都合よき仏像注意致し居り候」とあり、岡倉没後も新納がボストン美術館のため、仏像購入の役割を担っていた

ことがわかる。「木地」の「聖観音の立像」と「銅の観音」を見つけ
て引き取ったことを伝え、それぞれの値段、状態、評価について説明
し、購入の是非について尋ねている。「追白」に「中川君米国より通
信なき為め渡米の期確定せぬや二御座候」とあるが、「中川君」とは
古社寺保存会の仕事に従事した東洋美術史学者の中川忠順（一八七三
～一九二九）を指す。中川も明治四十四年に鑑査顧問に任命され、大
正四年三月から六月にかけてポストン美術館で中国と日本絵画コレク
ションの調査研究を行った。そのため書簡が書かれたのは、調査の前
年の大正三年と推察した。（五）からは、新納が（四）で尋ねた仏像
を二体とも送る準備をしていることがわかる。由三郎がポストン美術
館の購入の意志を新納に伝えたことが窺われる。（六）は新納が由三
郎に「拙案の天平更紗」を送ったことを伝える書簡である。文中の「飛
だ」は、飛田周山のことか。（七）は新納が「金五百円」を受け取っ
たことが記されるが、鑑査顧問の報酬は五百円であることから、ポス
トン美術館からの報酬と考えられる。「ウキテモアー氏」および「文
部省より二十一日間の出張命令」が何を指すかは詳びらかではない。
今後の課題としたい。（八）は年不詳であるが、ポストン美術館から
の報酬を受け取ったこと、領収書を送付することが記されており、新
納がポストン美術館と関係があった時期の書簡であろう。

（九）は小川芋銭に宛てた由三郎の書簡である。由三郎が芋銭から
贈られた『むじなの月』と題する絵の賛を借用して執筆した著述が、
『新青年』一月号に掲載されることを伝える内容である。『新青年』は
大正九年一月に創刊された雑誌で、由三郎は「ばかを言ふ」と題する
随筆を掲載した。

「ばかを化けと近い親類の語」と捉え、狐や貉の変化について、言
語や俳諧の知識を交えながら書き綴った文章である。文中で芋銭の賛
を引きながら、彼の「筆致の妙味」「飄逸の趣」を「天下一品」と称
賛している。

今日の本邦の俳画壇に、稜々たるその仙骨を筆致の妙味の中に纏
渺たらしめてござる、後素界の哲人、小川芋銭子は、上述のこの
不可思議の貉の戯れに題して、

貉の月と云ふものあり、その形いつも三角なり。彼、三角の月
を創造して、自ら欣び、自ら楽しむのみ、人に示して驚かさ
るゝにあらざ。人、偶々之を見て奇怪となすは、人の智足らざれ
ばなり。科学の人は、もつと勉強しなさいと、貉が云ふ。

と言ふ。一本の枯淡な立木のかなたに描いた、金泥の三角の月に
対して、きよとんと横体をすゑた一匹のおほ貉を配した、僕のこ
の秘蔵の一幅は、まことに天下一品、墨色なら筆勢なら、どこま
でも飄逸の趣が画面に溢れてゐる。特に最も珍とすべきは、芸術
の真意を述べた巧妙な警告の辞で、滔々たる今の世の美術家たる
者、若しこの心を帯して、画筆を振り彫刀を操らば、芋銭子の貉
が安住の、技芸の至上境も、自ら各自の心底に展開して、天地為
にいよいよ宏大無辺であらう。

（十）は、昭和五年四月からローマで開催された日本美術展覧会の
開会式に、作家代表として臨席する横山大観が作成した開会の辞草稿
の由三郎による写しである。由三郎の英訳原稿が残されていることか
ら、大観が翻訳を依頼したことが推察される。だが英訳原稿は四枚し
がなく、推敲が重ねられており、未完であるため本誌での紹介は見

送った。完成した英訳原稿は、同年一月三〇日に渡航した大観が持つて行ったのであろうか。『東京日日新聞』昭和五年五月七日〜八日号は、「ローマにおける日本美術院に就て 羅馬にて 横山大観」という記事を掲載し、大観が「四月廿五日付で『美術愛好家の批判を乞ふ』と題する（中略）一文をイタリー語に翻訳の上発表した」と伝えた。記事には本資料の内容が所々割愛され紹介されている。

(十一)は富田幸次郎（一八九〇〜一九七六）から岡倉由三郎に宛てた書簡である。富田は明治四十四年からボストン美術館に雇用され、岡倉寛三没後も同館に残り、大正五年に中国日本美術部アシスタント・キュレーター、東洋部と改称された昭和六年にはキュレーターに就任した。昭和六年十一月、米国オハイオ州トレド美術館で現代日本画展が開催されると由三郎は渡米し、美術特使として活躍した。翌年一月よりニューヨークのレーリッヒ美術館でも開催が決定すると、当地でも米国における日本美術への理解深化を図った。レーリッヒでの役目を終えると、由三郎は本業の英語教育研究のため渡英した。本書簡は、ロンドンから由三郎が送った手紙を読んだ富田が、「御急ぎの為或ハ当地に御立寄なく西部に御向相なるやも計られず」と知り「失望」した心情が綴られる。だが実際は、この手紙が書かれた翌三月四日に、由三郎はレーリッヒの次の巡回地ボストン美術館を訪問した。富田の手紙にある通り、松元道夫の《耕作》が一七五ドルで、平井棟仙の《初冬暮色》が九〇ドルで売却された。また橋本閔雪の《木蘭詩》は展覧会終了後にボストン美術館に寄贈された⁶⁾。

(十二)は由三郎に宛てた茨城のジャーナリスト渡辺実（鼓堂）の書簡である。渡辺は、明治四十四年に『いはらき』新聞編集長に就任

した後、大正四年に『茨城毎日新聞』を創刊、さらに昭和十二年には『茨城政経時報』を創刊し、同十九年に没した。『茨城政経時報』第七号第三号「社長渡辺鼓堂追悼号」（昭和十九年三月一日）には、葬儀委員として大観、斎藤の名が掲載されており、さらに斎藤、飛田周山、堅山南風が哀悼の文を寄稿している。大観は水戸市神崎寺の鼓堂の墓石に「渡部実之墓 大観書」と揮毫しており、日本美術院との関係は深い⁷⁾。本書簡は、渡辺が由三郎に納豆を送ったことを知らせるものであり、両者の交流が窺われるとともに、由三郎が茨城の知識人ともネットワークを築いていた証左となる⁸⁾。

〔附記〕

資料の掲載を快諾くださった川上宗雪氏、岡倉俊彦氏、茨城県天心記念五浦美術館に感謝を申し上げる。協力資料の解説に際しては、川上宗雪氏、木戸之都子氏、岸美美子氏のご協力を賜った。あわせて謝意を表したい。

註

(1) 清水恵美子「美術交流における岡倉由三郎―米国現代日本画展を中心に―」(『LOTUS』第三十五号、日本フェノロサ学会、二〇一五年)、九七〜一二二頁。

(2) 「國華清話会並びに第一回特別鑑賞会」(『國華清話会』第一号、國華社、平成十五年)、十八〜十九頁。川上宗雪(江戸千家家元)「江戸千家のことなど」(『國華清話会』第十八号、國華社、平成二十三年) 八頁。

- (3) 岡倉覚三とコーヒーとの関係については、鈴木蒼志男「岡倉天心とボストンのコーヒー―天心ゆかりの地五浦での、珈琲茶席を機に考えるコーヒー文化―」（『珈琲と文化』第一〇一号、いなほ書房、二〇一六年、二二～二七頁）を参照されたい。
- (4) 岡倉由三郎「文藝漫談 七月十日例会に於ける講演 岡倉由三郎（一）」（『いはらき』昭和六年七月十五日号、いはらき新聞株式会社）。「文藝漫談」は七月十五日号から十八日号にかけて四回連載された。
- (5) 大西純子「早崎稗吉の活動について―ボストン美術館蔵岡倉覚三蒐集中国彫刻コレクションを中心として―」（『MUSEUM 東京国立博物館研究誌』第六五六号、東京国立博物館、二〇一五年、三〇～三一頁）。
- (6) 清水恵美子「一九三〇年代初頭の米国における現代日本画展覧会」（『文化資源学』第十三号、文化資源学会、二〇一五年）、六九～七二頁。
- (7) 渡辺は明治四十年九月二十二日、五浦で開催された観月園遊会に出席し、『いはらき』九月二十六日号に当日の様子を紹介する記事「五浦の月」を掲載した（清水恵美子「日本美術院の五浦時代と『いはらき』新聞―地域との交流からみる五浦時代の再考察―」、『近代画説』第二十二号、明治美術学会、二〇一三年、一三二～一四九頁）。

〔しみず えみこ〕所員・本学社会連携センター准教授